

〈論文〉

金蘭周訳『源氏物語』から見る
現代語訳『源氏物語』の問題点について
—「若紫」「紅葉賀」—

田中 幹子・金 智慧

はじめに

今、韓国でもっとも読まれている『源氏物語』は、2007年に出版された金蘭周訳、金裕千監修『源氏物語』(注1)である。金蘭周氏は日本近代文学を専攻した日本文学専門の翻訳家として著名であり、村上春樹、吉本ばなな、江国香織の本を翻訳して大衆的にもよく知られている専門の翻訳家である。金訳の『源氏物語』は祥明大学校の金裕千氏が監修し、ハングル社で2007年に出版された。金訳は初めから瀬戸内寂聴訳の『源氏物語』を底本として翻訳したと述べており、瀬戸内氏の解説、高木和子の語句解釈もそのまま訳している(注2)。

金氏が瀬戸内訳を選んだ理由については、「瀬戸内版は日本人達により親近な筆致を駆使することで記録的な販売部数を上げて、日本内での源氏ブームの契機を支度したという評価を受けている。」と監修者の金裕千氏が述べている。そして金蘭周訳を韓国語完訳の決定版とされている(注3)。

『源氏物語』の韓国語訳に関しては、最初の韓国語訳である柳呈訳についての考察が主である(注4)。但し、柳呈訳は今絶版しており現在の韓国の読者には手に入りにくい(注5)。金鍾徳氏は、柳呈訳に限らず、韓国語訳『源氏物語』の網羅的な研究で知られており、柳呈訳の他に、金蘭周訳、田溶新訳について、巻名・人物名・地名と儀礼・和歌と草子地の翻訳という四項目を立て、それぞれの訳に対して考察されている(注6)。

田溶新訳は、訳者自身が「底本として日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)を選び、現代語訳を翻訳して、理解が難解な部分を原文によって修正した」と述べている。しかし、その実態は、かなり杜撰な翻訳であり、訳本として問題があることが指摘されている。(注7)。

各訳への考察を経て、金鍾徳氏は「翻訳を直訳と意識に分類するが、むしろどれほど原作に忠実な翻訳であるかがより重要な問題だと考えられる。」と述べられている。

冒頭でも述べたように、今、韓国において『源氏物語』を理解しようとする際、最も読者に大きな影響力のある訳は、金蘭周氏によるものである。しかし、金蘭周訳『源氏物語』が「どれほど原作に忠実な翻訳であるか」という観点で検討してみると、原文解釈においていくつかの問題点が見られた。本稿では、そのうち、「若紫」「紅葉賀」の例について指摘し、考察していきたい。金蘭周訳の逐語訳、及び、韓国語としての妥当性については、韓国中央大学校日本語学科の交換留学生である金智慧氏が考察している。したがって、本稿は、田中・金の共同研究であり共同執筆である。

1 文脈理解の問題について —「紅葉賀」—

『源氏物語』に限らず、日本文学の特徴として主語や目的語を明確にしない。そのため現代語に訳する際に違う解釈が生まれやすい。

金蘭周訳の問題点として、まず、語訳の観点から「紅葉賀」から1例をあげる。ここは、藤壺を恋焦がれる源氏が、藤壺が退出した三条宮に見舞いと称し参上し、若紫の父親で、藤壺の兄である兵部卿と対面する場面である。藤壺と直接顔を合わせることが適わない源氏に比べ、同腹の兄である兵部卿宮は、親しく藤壺の御簾の中に入ることができる。その兵部卿を前にしての光源氏と、光源氏を前にした兵部卿の互いの感慨が描かれている。

「紅葉賀」

原文：

いとよしあるさまして、色めかしうなよびたまへるを、女にて見むはをかしかりぬべく、人知れず見たてまつりたまふにも、かたがた睦まじうおぼえたまひて、こまやかに御物語など聞こえたまふ。宮も、この御さまの常よりことになつかしううちとけたまへるを、いとめでたしと見たてまつりたまひて、婿になどは思しよらで、女にて見ばやと色めきたる御心には思はず（注8）。

現代語訳：

その兵部卿宮はじつに風情のあるご様子で、なまめかしくやわやわとしていらっしゃるの、このお方を女にしてお相手したらさぞかしおもしろかうと、君はひそ

かにお思い申されるにつけても、藤壺の宮やこの姫君のご縁からしても、親しみをお感じになり、懇ろにあれこれの世間話をお申しあげになる。宮も、この君のご様子が常よりも格別やさしく打ち解けていらっしゃるの、ほんとにみごとなお方とお思い申して、まさかご自分の娘の婿になどはお思いよりもならず、君を女にして逢ってみたいものと、色めいたお心から、そんなお気持ちになっていらっしゃる。

光源氏は、兵部卿宮を女にしてみたいと思い、兵部卿宮も光源氏を女にしてみたいと思っている。つまり、双方が相手を女にしたいという内容なのだが、この部分、金周蘭訳では、以下のとおり訳している。

金蘭周訳：

병부경은 우아하고 반듯한 차림새에 부드럽고 매혹적인 분위기를 풍기니, 겐지는 자기가 여자라면 한번 사귀어볼 터인데, 하고 마음속으로 생각했습니다. 그러자 후지쓰보의 오빠이며 무라사키 아씨의 아버지인 그에게 더욱 친밀감이 느껴져 세심한 주의를 기울이며 많은 이야기를 나누었습니다. 병부경도 겐지가 평소보다 한층 친밀하게 속을 터놓는 터라 정말 보기 드물게 훌륭한 사람이라고 생각하면서, 겐지가 사위인 줄은 꿈에도 모르고 자기가 여자가 되어 사랑을 나누고 싶다는 은밀한 생각까지 품었습니다.

兵部卿は優雅で整っている装いに、やわらかく魅惑的な雰囲気漂わすので、源氏は自分が女なら一度付き合ってみるはずなのに、と心の中で思いました。すると、藤壺の兄で紫姫君の父親の彼にもっと親密感が感じられて細心の注意をむけながら多い話を分かちました。兵部卿も源氏が普段より一層親密に心を打ち解けるので本当に見ることの稀な素晴らしい人だと思ひながら、源氏が婿なのは夢にも知らず、自分が女になって恋を分かちたいという隠密な想いまで抱きました。

金訳では、源氏、兵部卿双方が自分が女になって付き合いたいと訳されている。金訳は、瀬戸内訳を重訳していると表明している。この部分の瀬戸内訳は、次の通りである。

瀬戸内寂聴訳：

兵部卿の宮は奥ゆかしいすっきりした御様子で、色っぽくなよやかでいらっしやいます。源氏の君は、自分が女になってお付き合いしたらさぞいいだろうと、心ひそかにお思いになります。すると、藤壺の宮の兄宮としても、若紫の姫君の父君としても、

いっそう親しみをお感じになられて、こまやかな心遣いでしみじみお話をなさいます。

兵部卿の宮も、源氏の君がいつもより特に親しそうに打ちつけていらっしゃるのを、世にもすばらしいとお思いになって、源氏の君を娘婿になどとは全く思いもよらず、自分が女になって恋をしたいものだと、色好みなお心の中ではお思いになるのです。

源氏、兵部卿宮が共に自分が女になってと訳している。金訳はこの瀬戸内訳をそのまま受け継いでいることがわかる。瀬戸内氏は、講演等において訳すにあたり、円地文子訳を意識したと語っている（注9）。円地訳の場合は、問題の箇所をそれぞれ「源氏の君は、自分が女になってこの方のお相手にまわったら面白いだろうと」、「この君が女であつたらさぞ素晴らしいであろうと、色好みなお心にはお思いになるのであつた。」となっていた。つまり、源氏の方は女になりたい、兵部卿宮は、源氏を女にしたいと訳している。

谷崎訳の場合は、『潤一郎新訳』（注10）では瀬戸内訳と同じく「もしも自分が女の身でお逢ひ申すのであつたら」、「自分の身が女であつたらと、浮気なお心の中ではお思ひになります。」となっていたのが、『新新訳源氏物語』（注11）になると「もし宮を女の身にしてお逢ひ申すのであつたら面白いであろうに」「この君を女にしてみたいものよと」と訂正されていた。これは谷崎が『新新訳源氏物語』においてより原文に忠実に訳そうと意識した現れの一つであろう。なお、与謝野訳『新譯源氏物語』では「なよなよとした美しい宮を女にして見たら」「此人を婿とも知らないで、輝くやうなこの顔を女にして見たい」と訳されていた（注12）。

原文の「女にて見む」の「（相手）を女にして見よう」が金訳、瀬戸内訳、谷崎新訳では「（自分が）女になって（相手）を見よう」となっている。「にて」は、指定の助動詞「なり」に接続助詞「て」がついたものであり、「であつて」の意である。したがって、「（相手が）女であつて自分（源氏）が見よう」という意味であり、文法的には源氏が兵部卿宮を女にしたいという方が正しい。

『源氏物語』には、この他にも「院のありさまは、女にて見たてまつらまほしきを、」
「院のご容姿は、女にしてお目にかかっていたいくらいにお美しいが」（総合）と源氏が兄朱雀院を女になぞらえている場面がある。この部分は、金訳、瀬戸内訳、円地訳すべて朱雀院を女として訳している（注13）。

新古典文学全集本では、「女にて見む」（紅葉賀）の部分に「宮を女としてお相手としたら。兵部卿宮の優艶な容姿に接して源氏はそれを見立てたい。当時の理想の男性美も女性的な風容に求められた。」と注がある（注14）。

王朝の美意識として、相手の美を讃えるために、女にしたいという表現を用いているのである。自分が女になって抱かれたいという倒錯的感覚は、『源氏物語』にはない。『とりかへばや』などの王朝美に憧れた中世物語の退廃的美意識に影響され、このような解釈を生んだのではないだろうか。それら現代語訳が金蘭周訳に代表されるような翻訳に影響を与えている。

2 訳文の表現の問題 —「若紫」—

次に、訳の表現によって、登場人物像が異なる印象をもたらす例をあげる。次にあげる「若紫」の場面は、光源氏が藤壺恋慕のあまり、彼女の面影を宿す若紫を強引に邸に連れていってしまい、それを知った彼女を引き取るはずだった、継母の思いが語られる場面である。

「若紫」

原文：

北の方も、母君を憎しと思ひきこえたまひける心もうせて、わが心にまかせつべう思しけるに違ひぬるは口惜しうおぼしけり。

現代語訳：

宮の北の方も、母君を憎いと思ひ申しておられた気持も今は失せて、姫君をご自分の思いのままに扱うことができようと思っていらっしゃったところが、あてのはずれてしまったのは残念なこととお思いになるのだった。

兵部卿宮の北の方の予定では、継子の若紫を「わが心にまかせつべう」予定であったのが、「違ひぬる」が「口惜しい」に注目されるべきである。つまり、自分の好き勝手に扱えるはずが、あてがはずれたということである。新古典文学大系本では、「故母君を憎いと思っていたことがここではっきりと書かれる。継母である北の方としては、孤児の紫上を引き取って思うままにしたいと思っていたことが分かる。養母として存分にふるまうつもりだということであろう。話型的には継子いじめを感じさせる。」(注15)と注されているように、北の方の若紫に対する思いは、決して慈母のようなものではない。だからこそ、若紫、後の紫の上が、なさぬ仲の明石姫君を慈しみ育てたことを物語の中でまれに見る美徳として強調されるのである。

しかし、金訳では、継母である兵部卿宮の北の方が母としての自覚を持っていたような印象を与える。

金蘭周訳：

병부경의 부인도, 어린 아씨의 어미를 미워하던 마음이 가서 아씨를 자기 뜻대로 키워보려고 마음먹었던 차에 이런 뜻하지 않은 일이 생겨 유감스럽기 짝이 없었습니다.

兵部卿の婦人も、幼い姫君の母親を憎んでいた心が消えて、姫君を自分の意志通り育てようと心立ったところにこう思いがけないことができて残念で極まりなかったです。

この部分、古典文学全集を参考にしたと表明する田溶新訳でも「그의 본처도 자의상의 어머니를 미워했던 마음은 사라지고, 자의상의 장래를 돌보아 줄 수 없게 된 것을 유감스럽게 생각했다. 彼の本妻も紫の上の母親を憎んでいた心は消え, 紫の上の将来を面倒見れなくなったことを残念に思った。」となっており,やはり宮の北の方の母として若紫の将来を考えていた印象をうける。金訳の基になった瀬戸内訳は以下のとおりである。

瀬戸内寂聴訳：

宮の北の方も、姫君の母親を憎んでいられた気持も消えて、姫君を自分の思うように育ててみようと考えていた矢先に、その心づもりが外れてしまったことを、残念にお思いになるのです。

円地訳・谷崎訳・与謝野訳も比較する。

円地文子訳：

継母の北の方も、あの方の母君を憎いとお思いになっていたお心も失せて、姫君を御自分のお心のままに育ててみようと思っていच्छゃったのに、その心当てが外れて残念にお思いになった (注 16)。

谷崎潤一郎訳：

北の方とても、一時は姫君の母なるお人をお憎みになつたけれども、今はそのやうなお心も失せて、思ひ通りに育て々みようと考えておいでになつたのに、あてが外れてしまつたことを残念に思し召すのであつた (注 17)。

与謝野晶子訳：

夫人はその母君を妬んでゐた心も長い時間に忘れて行つて、自身の子として育てるのを楽しんでゐたことが水泡に帰したのを残念に思つた。(注 18)

ここから受ける北の方の印象は、悪くない。これは「北の方も、母君を憎しと思ひきこえたまひける心もうせて」の表現にひきずられたためであろう。伝統的な継子いじめ譚を意識しなければ、このような訳がなされる可能性もある。しかし『源氏物語』内では、兵部卿宮の北の方の性格は、紫の上を憎む意地悪い性格として一貫性がある。反若紫としての立場である。若紫にとって、兵部卿宮の北の方は、常に悪の存在でなければならない。そうでなければ、光源氏が若紫を連れ去ったことが悪になるからである。北の方が優しい人であつたら光源氏が紫の上を引き取った行動は妥当性がなくなり単なる拉致になつてしまふだろう。新古典文学全集本でもこの部分「実の娘のように愛育するというよりも、紫の上の美質ゆえに、親権を行使し将来の縁組などを期待し楽しむといった気持ち。父宮の北の方の心理にふれることは、源氏の庇護下に入った紫の上の幸運を強調することになる。継子物語の趣向の大幅な変形において、新しい物語内容が獲得されたといえよう。しかし紫の上には終生、継子物語の女主人公の孤独な影がつきまともいづく。」と注されている。宮の北の方は、光源氏の須磨退去の話聞いた際、以下のように反応する。

「須磨」

原文：

継母の北の方などの、「にはかなりし幸ひのあわたたしさ。あなゆゆしや。思ふ人、かたがたにつけて別れたまふ人かな」とのたまひけるを、さるたよりありて漏り聞きたまふにも、いみじう心憂ければ、これよりも絶えておとづれきこえたまはず。

現代語訳：

継母の北の方などが、「にわかになりついた幸運があわただしく逃げてゆくこと。なんとまあ忌まわしい。かわいがかつてくださる人に、それからそれとお別れになる人ですね」とおっしゃっていたのを、ある筋があつてお耳になさるにつけても、ひどく情けないお気持ちで、こちらからもふつつとお便り申しあげなさらぬ。

若紫が、一番、頼りたい時に手を差し伸べるところか、その不運を嘲る言葉を吐く。この姿は、金訳も同じ姿勢で訳す。

金蘭周記：

“갑작스럽게 행운을 잡았나 했더니 오래가지도 못하는군. 불길한 일이야. 사랑해주는 사람과는 잇달아 헤어질 운명인 것이야.”

계모가 이렇게 말했다는 소리를 어디에선가 전해 들은 무라사키 부인은 그 박정함이 서러워 소식을 영 끊은 터였습니다. 겐지 말고는 의지할 곳 없는 몸, 참으로 서글픈 처지입니다.

「にわかに幸運を掴んだとしたら長くもできないね。不吉なことだよ。愛してくれる人とは次々と別れる運命なのよ。」

繼母がこう言ったという噂をどこかで伝わって聞いた紫婦人はその薄情さが悲しくて便りを絶えたところでした。源氏以外は頼るところのない体、本当に痛ましい境遇です。

この訳の基になった瀬戸内訳は以下のとおりである。

瀬戸内訳：

繼母の北の方などが、「降ってわいた幸運の、何とまあ短いこと。縁起でもないわね。可愛がって下さる方には、次から次へ別れる運命の人なのね」

とおっしゃっていたのを、あるところから洩れ聞かれました。

紫の上はつくづく情けなくなって、それ以来、こちらからもふっとりとお便りをさし上げなくなりました。

兵部卿宮の北の方が、酷い人物であればあるほど、若紫には源氏しか頼る人がいないのだ、源氏が若紫を無理に邸に連れてきたことは彼女にとってもいいことだったのだと納得できる。

したがって、「若紫」の兵部卿宮の北の方の「わが心にまかせつべう思しけるに違ひぬるは口惜しうおぼしけり。」は、若紫の将来を考えた優しい親心からの言葉ではなく、自分勝手に若紫を使えると思っていた思惑が外れたという口惜しさでなければならない。

繼母の繼子いじめは韓国にも似たような発想があり、韓国の古典文学にも存在するもので、韓国の読者からも違和感を感じさせる内容である。

訳文のニュアンスで、人物に対する読者の印象が大きく異なってしまう例といえる。

3 まとめ

『源氏物語』の原文をそのまま韓国語訳にすることは難しいことであろう。近年、金鍾徳氏によって「小学館『新編日本古典文学全集』の原文を中心に翻訳し各種註釈と日本現代語翻訳を参考にした。」として韓国語訳『源氏物語』も訳されたが、完訳ではなく、一般読者の教養書の種類に相当するものである（注18）。

現在、韓国において完訳として、知られるものは、柳呈訳が与謝野晶子の現代語訳を、田溶新訳が小学館の現代語訳を、金蘭周訳が瀬戸内寂聴訳の現代語訳を訳しているとされている（注19）。厳しく言えば、韓国語で訳する際に底本の間違いを客観的に見極めず、そのまま受け継ぐのは韓国語訳で訳した者の問題であろう。金蘭周訳の場合、監修者の金裕千氏は日本古典文学の研究者であるので、『源氏物語』の世界観、平安文学の背景などを考慮して、指摘することも可能ではなかったかとも考えられる。

しかし、外国語の原文、しかも文化的背景を考慮して古文を直に翻訳するというのは、至難の業である。その際、読みやすい現代語訳に頼ってしまう心境も十分理解できる。ただ、その読みやすさが問題なのである。それぞれの現代語訳が、研究者の訳した文章よりも読みやすく、魅力的に見える。それは、与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、瀬戸内寂聴氏がみな、一流の小説家であり、原文に忠実という意識をもってしても、本来の小説家魂が無意識に己れの解釈を加えてしまっているからである。したがって、日本の『源氏物語』研究者は、それぞれが与謝野源氏、谷崎源氏、円地源氏、瀬戸内源氏として扱い、紫式部が何を表現しようとしているかを考える時は、あくまでも原文に基づいて考察するのである。

最近、現代語訳『源氏物語』の研究もなされるようになってきた。海外の『源氏物語』の研究者、読者が増えている現状を考える時、瀬戸内訳を初めとする小説家による現代語訳の実態について研究し、それが海外の翻訳にどう影響しているかを考慮する時期にきているのではないだろうか。小説家による現代語訳『源氏物語』の研究も、『源氏物語』の享受の一つとして位置づけられ、もっと積極的に研究対象とされるべきであろう（注20）。

注

- 注1 『源氏イヤギ』全10巻・(2007年、図書出版ハンギル社。)
- 注2 瀬戸内寂聴訳『源氏物語』(講談社・2007年)
- 注3 注1『源氏イヤギ』解説。
- 注4 伊藤好英「柳呈による韓国語訳『源氏物語』の「本文」「解説」「注釈」について」(『芸能』15 芸能学会・2009年3月)、日向一雅「朝鮮語訳『源氏物語』について」(『新 源氏物語』2 1994年)、李芝善「韓国語訳『源氏物語』にみる古典文学翻訳論—柳呈訳を中心に—」(『物語研究』8、物語研究会 2008年3月)。
- 注5 柳呈訳『源氏イヤギ』四種でており、1・上下2巻「世界古典文学大全集」文友社・1973年。2・1巻「世界文学全集」、乙西文化社、1975年、3・上下2巻「新装版世界文学全集」、乙西文化社、4・上下2巻「世界代表古典文学全集」、韓国出版社、1982年)。
- 注6 金鐘徳「韓国における源氏物語研究」(源氏物語講座9『近代の享受と海外との交流』勉誠社、1992年、同「韓国における『源氏物語』の翻訳と研究」『源氏物語千年紀記念 源氏物語国際フォーラム集成』源氏物語千年紀委員会 2009年3月)、ほぼ同じ内容で『韓国軍事文化研究』2009年所。
- 注7 田溶新訳『源氏物語』1・2・3(ナナム出版 1999年、田訳の問題点の指摘は注5金鐘徳氏の論考。および、拙稿「韓国語訳『源氏物語』における解釈上の問題点について—「桐壺」(1)—」『比較文学論叢』13』2010年12月)。
- 注8 本稿『源氏物語』の原文、および、現代語訳は、新日本古典文学全集『源氏物語』小学館(阿部秋生他校注、1994年)使用。
- 注9 新潮文庫円地文子訳『源氏物語』2008年発行のあとがき、および帯文
- 注10 『潤一郎新訳 源氏物語』巻二(1951年、中央公論社)。(1951年版もまったく同じ)、『潤一郎訳 源氏物語』巻三(1939年、中央公論社)ではこの部分省略されている。
- 注11 『新新訳源氏物語』(1964年～1965年中央公論社)『谷崎潤一郎全集25巻』所収。(1968年、中央公論社)。
- 注12 与謝野晶子『新譯源氏物語』上(1912年 金尾文淵堂)、『新新訳源氏物語』(1938年から1939年 金尾文淵堂)も同文。
- 注13 瀬戸内訳「朱雀院の御容姿は女にして拝見したいぐらいお美しいのですが、」金蘭周訳「스자쿠선황의 용모는 여자로 꾸며 바라보고 싶을 정도로 아름다운데、」(朱雀先皇の容貌は女に飾って眺めたいほど美しいのに)円地文子「院の御有様は女にしても見まほしいほどに優美でいらっしゃるのに、」なお、谷崎、与謝野訳はこの部分訳されていない。
- 注14 「総合」の部分に対しても新日本古典文学全集『源氏物語』では、「朱雀院を女として拝見したい意。院の優美さをたたえた表現。」という注がついている。
- 注15 新日本古典文学大系19『源氏物語1』(1993年1月第一刷発行・岩波書店・柳井滋・室伏信介・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西佑一郎校注)。
- 注16 円地文子『全訳源氏物語』新装版全五冊(角川書店2008年)。
- 注17 『潤一郎新訳源氏物語』注10参照。谷崎訳の「若紫」のこの部分は、『新訳』『新新訳』は、である体がです体にかわっているが、内容は変わらない。
- 注18 『新新訳源氏物語』注12参照。『新譯源氏物語』にはこの部分省略されている。金鐘徳訳『源氏イヤギ』(지식을만드는지식 2008年)。
- 注19 田氏訳の問題点については、注6参照。
- 注20 その成果の一つが、平沼恵・五十嵐正貴「『源氏物語』現代語訳の流れ—与謝野晶子から橋本治まで—」『国文学解釈と鑑賞』59(3)1994年3月 至文堂)である。